

正しい寸法

イーシャ・サーデサイによる再話

昔、中国南東部にある婺源（ぶげん）地方の緑の丘陵地帯に、数字の好きな男が住んでいました。その男は値を付けられるものならどんなものにも値を付け、ペンを駆使して正確に測れるものであれば、何でも測りました。彼は数字が示す明快さ、効率性、安全性が好きでした。数字に挟まれ、個別の単位に細分割されて、彼の世界は組み立てられていました。秩序があり、理にかなっていました。

それで、ある晩、その男は自分の小屋の床に座り、両脚を前に伸ばし、手には紙の束を持っていました。彼は自分の足の輪郭を写し取っていたのです。

彼は頭を片側に傾け、集中し、目を細めていました。舌は口の端からかたくなに突き出ていました。ゆっくり、ゆっくり、これでもかというほどゆっくり、かかとの周りに沿ってペンを動かしました。いったん動きを止め、今度は頭を反対側に傾けて、爪先の湾曲した所をペンで囲みました。そうです、この男には新しい靴が必要なのです。そして彼は、ぴったり合ったものでなければならないと固く心に決めていたのです。

足の輪郭を実に正確に描いたと満足したその男は、足の下から紙を引き抜いて、描いたものを測り始めました。それは正確にまさしくこの長さ、厳密にまさにその幅でした。足裏の母趾（ぼし）球からかかとの間の長さは x で、それは足底弓の長さは約 y ということの意味しました。男は測定結果を何度も確認し、それからこの手順をもう一方の足で繰り返しました。

翌朝、太陽が山腹での眠りから出るや否や、彼は市場に向かって出発しました。一番近い村はかなり離れていたもので、そこまで歩いて行くとなると数時間はかかる旅となるでしょう。しかし彼は前進し、曲がりくねった土の道や黄色い花の咲いた山の段丘を横切っていきました。やがて、太陽は頭上でより明るく、より熱くなりました。彼の呼吸は少し浅くなりました。

とうとう彼は市場にたどり着きました。そこは、食料品から絹の服、銅製の鍋まであらゆるものを売る商人や、最良の取引のために商人と押し問答する客ですごい人ばかりでした。遠くに、彼は靴職人の店を見ました。

彼は人混みをかき分けながら、自分の腰にくくり付けていた布袋に手を伸ばしました。自分が測った寸法を書いてある紙が袋のどこかに彼が持ってきた他の物と一緒に入っているはずでした。袋の中を引っかき回しながら、とう編みの弁当箱に手を触れ、それから、恐らく水筒だと思われるゴツゴツした長い物にも手を触れました。満足した様子で鼻歌を歌いながら、袋の中をまだ探していました。

「おかしいぞ」と、しばらくして彼は思いました。「見つからないな」。袋の中をもう一度、今度は必死に探しました。彼は胸や腿、さらにはお尻を軽くたたいて、自分の身体も調べ始めました。どこかに隠れたポケットがあつて、なぜか彼のとても大事な寸法が書かれた紙が小さく折り畳まれて入っているかもしれないのです。

しかし、そんなポケットはどこにもなく、紙もありませんでした。道の真ん中で、まさにそこで立ち止まると、苦い現実が分かってきました。彼はうつろな表情で前を見詰め、人混みは騒がしく彼を押しつけていきました。

ついに、彼は深く疲れ切ったため息をつきました。彼の体全体がしぼんでいったかのようにした。どうしたらよいのでしょうか。彼は新しい靴が必要でした。ぴったり合う靴が必要でした。彼はただ、足の寸法を描いた絵を取りに戻らなければならないのです。

そういうわけで、疲れ切った体を可能な限り早く動かして、彼は来た道に戻りました。彼の目には、田舎の美しい景色もぼやけていました。何度も何度も彼は自分を責めました。なぜこんなに軽率だったのか、どうしてこんな間違いをしてしまったのか、彼は理解できませんでした。なぜ寸法を忘れてきてしまったのか、あんなに時間をかけて正確に採った寸法を。

やっと家にたどり着き、玄関の扉を開けると、居間の、まさに彼が置いた所にその紙があるのが見えました。彼は、もちろん、欲求不満と同時に認めたくないけれども安堵(あんど)を感じて、ブツブツ言いながらそれをひつつかみました。そして、彼は再び村に向けての長い道のりへと出発しました。

市場にたどり着いたのはもう日が暮れる頃でした。もし彼が上を見上げていたら、薄暮の空に星がまたたき始めているのを見たことでしょう。そしてすべてがかすんだ紫色の輝きに包まれているのに気がついたでしょう。しかし、実際には、次第にまばらになっていく人混み、人通りの少なくなっていく通り、そして店じまいをする商店主たちしか、彼の目には入りませんでした。

男は靴屋へと向かいました。彼の胸はまだ激しい呼吸で波打っており、額は汗で光っていました。近づいていくと、靴屋のドアは閉まっていました。見習いだと思われる少年が、玄関のちりを掃いていました。

「すみません」と、男は嘆願するように言いました。「今日、靴を買う必要があるのです。靴屋さんはいらっしゃいますか？」

見習いの少年は掃くのをやめて、男を見上げました。「申し訳ありません、閉店しました。靴屋は今日はもう戻りません。別の時にいらしてください」

男は信じられないというように目を見開きました。「でも、でも」と、彼は早口でまくし立てました。「今日がどんなに大変だったか、あなたは分かっていませんよ」。そして、彼は、寸法を採ったところから、彼の物語の一部始終を語り始めました。彼の寸法の測り方がどんなにか素晴らしかったか、どうしてそれを家に置いてきてしまったか、どうやってそれを取りに家に戻らなければならなかったか、などなどを。

彼が話す間、見習いの少年は、初めは疑いの表情、そして、次には哀れみの表情をその顔に浮かべて、男を見詰めていました。男がついに彼の話を伝え終わると、「しかし、お客さん、」と、見習いの少年は言いました。「寸法をお宅に忘れてきたとしても、その間ずっと足はあなたに付いていたのではありませんか？」



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。

この物語は紀元前3世紀に書かれた古代中国の寓話(ぐうわ)に基づいています。